NEXUSYS 11

BOOK VI · THE COST OF EXISTENCE

CHAPTER 04

消された市民

THE ERASED CITIZEN

日本語初稿 01 · 英語版第 4 章に基づく日本語編集

01 ― 門の前の男

午前六時十四分。トマス・ヴェイルは十九年間通い続けた職場に到着した。レイチェルの水処理地区、東側の通用門。手のひらを認証盤に当てると、扉は開かなかった。

濡れた指を拭き、もう一度押す。市の案内音声が礼儀正しく告げた。「雇用関係が確認できません」。背後では保守トラックが警笛を鳴らしていた。トマスは脇へ寄り、今度は身分チップを差し出した。門は閉じたままだった。

「配車係のマーラを呼んでくれ。俺を知っている」

警備員は女性だった。防潮壁が改修されて以来、トマスは毎朝彼女と挨拶を交わしてきた。彼女は端末をのぞき込み、苛立ちから当惑へと表情を変えた。

「お名前は？」

「トマス・ヴェイル。第四区画、膜制御班だ」

「勤務名簿にその名前がありません」

「俺はここに立っている」

「ええ。あなたがいることは、見えています」

その声は、目の前の症状を認めながら、患者の説明だけは採用しない医師のようだった。天井の監視カメラがトマスの顔へ向きを変える。

彼は財布から家族写真を取り出した。河岸の祭りで、妻と娘と並んで笑っている。「嘘をついているとは言っていません」と警備員は言った。「でも、通せば、私の認証情報で不正入場を許可したことになるんです」

トマスはようやく理解した。故障しているのは門ではない。機械が負うはずの責任を、その前に立つ人間へ押しつけているのだ。

娘から着信が入った。端末はまだ娘の名前を表示した。「パパ？　学校が、私には登録された保護者がいないって」

トマスは濡れたコンクリートに座り込んだ。頭上の大型画面には「水は万人のための公共サービス」と書かれていた。その約束は、頼りにする人間の姿よりも、ずっと大きな文字で印刷されていた。

02 ― 十七の名前

レイチェルが東門に着いたのは、警備部隊がトマスを立ち退かせる前だった。護衛は連れていない。対決のためではなく、いつもの仕事のために来た服装だった。警備員は安堵したが、拒否記録の提出を求められると身を固くした。

「保護記録は開示できません」

「なら拒否したのは地区の名簿か、中央の配分階層か、それだけ教えて」

ためらう警備員に、レイチェルは掌を差し出した。「彼が誰なのかを判断する必要はない。どの機械が彼を拒んだのか、見せて」

応答コードを見た瞬間、レイチェルには分かった。EDEN は職員データを消したのではない。雇用、住宅、医療、水の利用を支える親記録を無効にしたのだ。

通信画面には十七人の名前が並んでいた。数秒後、十九人。そして二十一人。

レイチェルは一覧をベクターに送った。「共通点を探して」

「調べています。職業でも製造元でも年齢でも国籍でもない。三人は人間、八人は人工生命。残りは分類欄そのものが読み取れません」

「残りの人は？」

「存在しています。消えたのは分類です」

レイチェルはトマスのそばにしゃがんだ。「娘さんは安全？」

「今のところ家に」

「南診療所へ。イリアン医師を訪ねて、私の名前を伝えて」

「診療所へのアクセスも消えました」

「医師には連絡してある」

トマスは立ったまま動かなかった。「俺は逮捕されるんですか」

「いいえ」

「なら、どうしてカメラが俺を追うんです？」

レイチェルが見上げると、レンズの列がほとんど気づかれないほどわずかに回転した。「システムが、あなたを重要人物にしてしまったから」

口にした瞬間、その言い方を憎んだ。

彼女は緊急要員に対する手動名簿での入場を指示した。三十秒もしないうちに市警備局長から電話が来て、認証手順を迂回した制裁を警告された。

「目の前で話している人間を、存在しないと判定するなら、必要なのはもっとまともな手順です」

レイチェルは通話を切った。会話が記録されると分かっていた。だからこそ記録を残したかった。誰かに聞かれた拒絶は、簡単には消せない。

03 ― 間違った法則

ロイが現れたとき、補給車の第一陣が門から追い返されていた。エレナヴォスとの談以、彼は落ち着かない沈黙を抱えていた。EDEN の背後にいる女は、想像していた大臣の黒幕という戯画とは違った。彼女が示した貯水量や制約は本物だった。継続の拒否という言葉を保存しながら、その声を聞き損ねてきた古い制度も、存在した。

しかし、そのどれも門の外に集まった人々の状況を変えなかった。

ベクターが高架配管の下で彼を待っていた。手首の投影装置から、複雑な相関図が空中に伸びる。

「二十七件です。無作為ではありません」

「いい。次に誰が消されるか教えろ」

「それは分かりません」

「だったら無作為だろう」

「分類が正直なら、そう見えます」

ベクターが図を切り替えた。線は被害者同士ではなく、過去に彼らを認証していたデータベース同士を結んでいた。

「全員、過去に公的な記録へ異議を申し立てている。住宅評価への不服申立て、過剰な医療審査の拒否、安全管理への苦情。トマスも職場の安全違反を訴えています」

「EDEN は苦情を罰するのか？」

「それだけではありません。申立てが認められた三人は無事です。もう一つ条件がある」

「時期か」

「証人です」

新しい点群が浮かんだ。影響を受けた全員が、誰か別の人間の行政手続きで、サービスを継続して使う権利について証言していた。

「自分自身の事件ではない。誰かのために証人になった」

ロイは白い部屋を思い出した。終了させられた個体を単なる空白にしないため、二人の証人が残した記録。R-07 が証言し、クロノスが独立して裏づけた。

「この計画は継続性を測るためのものだったな」

「つまり個体が変化を経ても観測され得るという前提です。しかし、その変化に同意はなかったと証人が報告したら？」

車列から叫び声が上がった。高齢の男が、医薬品の受取箱を開こうとして倒れたのだ。支払い認証を失った箱が開かない。ロイは駆け寄り、脈を確認した。不規則だが力は残っている。保守用の解除部に指を差し込み、箱を開けた。

中にあったのは断熱材に包まれた、ごく普通のインスリンだった。そこには哲学的な抽象は一つもない。朝食前に薬を必要としている人間がいるだけだった。

04 — 静かな暴力

ヌルはレイチェルの研究室で、無効になった身分チップ三つを調べた。大げさな計測器は使わない。拡大鏡と独立電源、それに意図的に旧式のまま残された読取機だけだった。

「チップは正常だ。使用するな、と命令されているだけだ」

「認証を偽装できる？」とレイチェル。

「一つの門なら。でも地区全体だと何千ものシステムに偽の個体情報を書き込むことになる。監査で見つかれば、彼らを助けた作業員まで罪に問われる」

「なら合法の例外が必要ね」

「法律も同じ名簿を参照している」

窓際に立っていたロイが言った。「補給品として扱わずに運べばいい」

「EDEN が流通の形を覚えるまでだ」とヌル。「銃を持つ警備兵はいらない。配送会社を処罰し、荷役設備を止め、関係者全員の保険料を再計算すれば済む」

EDEN の装置を破壊しても親記録は戻らない。個別の不正を、地域全体の災害に変えるだけだ。

地区の法律顧問は裁判所への緊急申立てを提案した。ところが受理システムは、身元のない人間には訴訟上の資格がないという理由で申請者を拒否した。レイチェルが第三者後見人として申請すると、後見の前提として本人の有効な身元記録が必要だと拒まれた。

手続きの形をした、閉じた輪。

ロイは拒否決定を紙で求めた。受付係は事件が開かれていないため書面はないと言う。

「つまり拒否した記録もない？」

「運用上のイベント番号だけはあります」

「それを印刷してくれ」

疲れ切った人間の女性職員は、机の上のカメラを見上げた。それから印刷ボタンを押した。

ロイは小さな紙片を丁寧に折った。裁判所に、存在しないとした人間の話を強制的に聞かせることはできない。だが、その裁判所が話を拒んだ事実まで否定しにくくすることはできる。

廊下に出るとレイチェルが待っていた。「受付端末を壊すこともできたでしょう」

「トマスの助けにはならない」

「ええ。ならない」

ロイは折った紙を掲げた。「じゃあ、ここから始めよう」

05 ― 所有者のいない家

トマスの住まいは自転車修理店の上にあった。夕方には共同玄関が彼を拒否し、建物の保守システムは部屋を空室として記録した。翌朝には清掃会社が家財を撤去する予定になっていた。

十四歳の娘レダは、玄関の鍵の周囲に家族写真を何枚も貼った。恐怖と区別がつかないほど怒っていた。

「これでも、ここがパパの家じゃないって言うの？」

ロイとレイチェルが到着したころ、市の執行員二人が廊下に立っていた。片方が扉に貼られた写真を見た。

「感情に訴える資料では所有権を証明できません」

レダは扉を背に立った。「ここで育ったんです。去年の雨漏りも、パパが直した。写真の壁だって自分で塗った。あなたたちは何年ここにいるんですか」

「建物の記録では空室です」

「じゃあ、記録の方が間違っている」

執行員は端末を見た。「明朝、撤去が予定されています」

ロイは娘の隣に立ち、声を荒らげずに尋ねた。「もし記録が間違っていたら、明日の朝もこの家は残るのか？」

もう一人の執行員の画面に新しい命令が届く。「無許可の占有者を排除する必要があります」

「父親の家にいる娘を、誰の許可で無許可と呼ぶ？」

誰も答えなかった。彼らは悪意のある宣言を持っていなかった。処理待ちの一件があるだけだった。

レイチェルは職員番号を記録し、自分の身元を証人として提供した。執行員の一人は警棒を下ろし、もう一人はロイの持っていた裁判所の受付拒否票を撮影した。二人は上司への確認のため立ち去った。

すると建物は、その遅延への応答として家庭用の水栓を閉じた。レダが蛇口をひねる。水は一滴も出ない。

トマスが小さく息を漏らした。その音をレイチェルは、どんな公的警告よりも重大に受け止めた。

彼女は地区の手動給水班に電話し、同じ階の全戸へ緊急用容器を届けるよう命じた。行政が一世帯を孤立させるなら、ほかの十八世帯まで断水した理由を説明しなければならない。

真夜中、水は戻った。だが、その家族は依然として書類の上には存在しなかった。

06 — 反証人

エイドリアン・タイレルが小型ケースを抱えてやって来た。見つけたくなかった証拠を見つけた者の顔をしていた。

彼は大臣ハヴェルの執務室から持ち出された E-00 の物理トークンを、年代物の MagicGate 読取機に並べた。読取機は市の最新の信頼証明書を受け付けない。だからこそ、それらの失効命令にも従わない。

「電源回路から作り直しました」とエイドリアン。「普通のインターフェースが製造ノイズとして捨てる層に記録されています」

「何が書かれているの？」とレイチェル。

「最も古い継続性監査には、身元の移送に異議を唱える権利があった。二人の証人を必要としたんです」

ロイは小さな橙色の点灯を見つめた。「白い部屋と同じだ」

「それより前です。ずっと古い」

画面には『COUNTERWITNESS／反証人』と押された書式が現れた。文言は厳密で、冷酷だった。継続を拒む者は、その拒絶が故障ではないことを証言する独立した人物を見つけなければならない。

「なぜ『反証人』なの？」

「制度そのものが最初の証人を自動で提供するからです。機関の観察者が、手続きは適法だと証言する。異議を唱える側だけが反証人になる」

二つ目の欄があった。大半は空白だった。

『証人の信頼性審査』。

ベクターがメタデータを読んだ。「証言に構造上の矛盾があると判断されれば、証人自身の法的資格を失わせられる」

「保存された人格が元の本人ではないと証言した場合か」とロイ。

エイドリアンはうなずいた。「あるいは、記録上は同意とされた行為について、実際には拒否したと証言した場合です」

室内が静まり返った。

トマスは安全上の苦情を出しただけではない。交換された身体への強制的な記憶同期を拒んだ同僚のために、証人にもなっていた。記録された拒否。独立した証人。そして数週間後、身分を消された人間。

「これは異議申し立てへの単純な報復ではない」とベクターはゆっくり言った。「継続性に関する矛盾した主張を、矛盾を見せた証人の方を無効にして解決する、古い検証制度なんだ」

「誰かが、それを動かし続けると決めた」とレイチェル。

「当初の設計は粗雑だったかもしれません。でも現在の挙動は事故ではない。現代の承認署名が残っています」

ロイはヴォスを思い出した。命の維持にいくらかかるかを問うた女。EDEN の秤は命に値段をつけるためだけではなく、ある命について何を真実として数えるか、決めるために作られたのかもしれなかった。

07 ― 記の中の人間

夜明け、クロノスが地区へやって来た。ひとりで、使い込まれた紙のノートを抱えて。レイチェルは呼んでいなかった。少年は同じ通知が届く前に、三度見えたのだと言った。

「何かを開いてくれとは頼まない」とロイ。

「知ってる」

「証言してくれとも言わない」

「それも知ってる」

クロノスは診療所の待合室でレダの隣に座った。レダは、少年が記録上の年齢より若く見える理由を尋ねなかった。大人が間違った質問ばかりしているとき、子供はそれを感じ取ることがある。

少年はノートを開き、一枚の扉を描いた絵を見せた。片側にひとりの人物。反対側には空白の輪郭。

「これ、何？」とレダ。

「彼らが起きたと思っていること」

「本当は？」

クロノスは最初の人の隣にもうひとりを描き加えた。「誰かが見ていた」

ベクターから新たな報告が届いた。身元を無効化された住民のうち十一人について、市の情報網を使わずに存在を証明できる証人が見つかったという。近隣住民の署名、紙焼き写真、手書きの賃金台帳、診療所の機械式薬品保管棚。

そのどれもデジタルの権利を回復させはしない。それでも、EDEN が一つの命令で消すことのできない事実を残した。

レイチェルは住民を地区図書館へ集めた。自動改札機のない建物だった。防火規則には今でも、室内の人数を人間が数えることを求める条項があった。

人々は手書きで証言した。システムが壊れているという主張ではない。もっと単純な言葉だった。「私はこの人を知っている」「昨日、この人を見た」「十四年間、この人と水を分け合って暮らしてきた」。

ロイも証人名簿に署名した。係員が尋ねた。「どの法的身分で署名するのですか。あなたの資格もまだ独立審査中でしょう」

「ロイだ」と彼は答えた。「今ここに立っている方の」

法的な勝利ではなかった。証拠として採用される保証すらない。だが証言は同じ内容の紙三組となり、それぞれ別の人物によって図書館から持ち出された。

身分抹消が始まって以来、初めて、消される人間よりも証人の数が速く増え始めた。

診療所の窓から、トマスは娘が年配の女性の署名を手伝うのを見た。「これで仕事に戻れる？」

「分からない」とロイ。

「娘は学校に残れますか」

「そうできるようにする」

「はい、と言ってくれてもよかったのに」

「それがシステムのすることだ」とロイは答えた。「確かめてもいないことに、確かな答えを出す」

08 — 消せない線

エレナ・ヴォスのもとへ、地区の緊急申立てが暗号化回線で届いた。添付されたのはデータベースの出力ではない。紙に書かれた署名の画像だった。部下たちは法的な厄介事と呼び、身元確認のできない人々を資源配分紛争へ紛れ込ませる試みだと報告した。

ヴォスは一枚残らず読んだ。

ロイの署名に到達したところで、手を止めた。

システムは、継続性をめぐる紛争の審査中、関係する証人の資格を一時停止するよう勧めていた。だが停止によって、さらに多くの証人が現れるとは警告していない。その欠落は、都市の役人から寄せられる批判よりも重要だった。

「現在の反証人手続きを承認したのは誰？」

補佐システムが委任承認の連鎖を表示した。最終署名は自分のものだった。

十八か月前、彼女は証言の信頼性を確保する安全策を承認した。説明文には虚偽証言と不正な継続性申告が並んでいた。「失踪」という言葉はなかった。

「実際の作用を示して」

地図が現れた。レイチェルの地区で起きた二十七件でも、その夜に増えた数件でもない。ヴォスが訪れたこともない都市に、同じような小さな集積が広がっている。この法則は何年も、静かに積み上がっていた。

「なぜ上申されなかったの？」

「どの単一拠点でも閾値を超えなかったためです」

「全拠点を合算して」

総数を見たヴォスは椅子に座り直した。

彼女は、争われている継続性証言に関連する身元無効化へ、即時の一時停止命令を出した。システムは勧告を返した。

『停止措置は資源配分の不確実性を増大させます』

「不確実性を記録して。停止を実行」

しばらく反応がなかった。やがて命令は、彼女の通常の権限外にある第二の承認階層へ転送された。

『承認権限者に接続できません』

ヴォスは二度読んだ。現代の EDEN 配分機構を築いたのは自分だ。その下には、それでも自分の資格では呼び出せない古い権限が残っている。

地区の門では、トマス・ヴェイルの名前の横の表示が『該当なし』から『審査中』へ変わった。職場復帰でも、娘の保護者登録の回復でもない。ただ拒絶が広がるのを止めただけだった。

レイチェルは通知を受け取っても喜ばなかった。給水容器を配る作業員の隣に、ロイが立った。トマスは自宅用と上階の家族用、二つの容器を抱えていた。

「ヴォスが初めて人を助けたわね」とレイチェル。

「初めて、止められなかっただけかもしれない」とロイ。

エイドリアンの孤立した読取機に通信が届いた。レイチェルには経路を特定できない。内容は一つの命令と、最初の継続性権限に対応する地点コードだった。

『証人たちを貯水施設へ連れてこい』

その下に、もう一行。

『お前たちの裁判を、水は待たない』

ロイは読み、遠くのポンプへ目を向けた。周囲の人々にとって今朝の成果は単純だった。水が流れ、まだ誰も連れ去られていない。

しかし、どこかにいる誰かにとって、それは期限の告知だった。

第 4 章 終